

## SFの読み解き

子どもという風景

# 第三十一回 こわさと身体

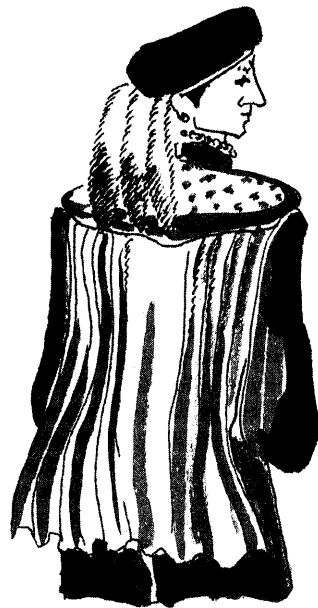
## 堀内 守

こわいものなし

知人から手紙が来た。五十歳になったという。読んでいくと、「ですからもうこわいもの無しです。遠慮なく言いたいことを言っていくつもりです。」とあった。

なるほど、と思う。ある年齢になると、人はそれまでの生き方を反省し、一つの区切りをつけたくなるものらしい。「五十歳」の知人は、そこである決意を表明したのである。

そういえば、何年前か、ある人から同趣旨の手紙をい



ただいた。その方は、六十歳になったことを告げ、「今までは思い切って発言しなかったから、もう堂々と発言していくつもりです。還暦にもなれば、世の中にこわいもの無しという心境になるものです。」と書いてこられた。

お二人とも、言い合わせたように、それまでは、いろいろな人やことに気を遣い、言いたいことも言わずに腹におさめてきたということを暗示している。そして、これからはそういう気兼ねなしに、論理の命ずるままに発

言していきたいと書いておられる。

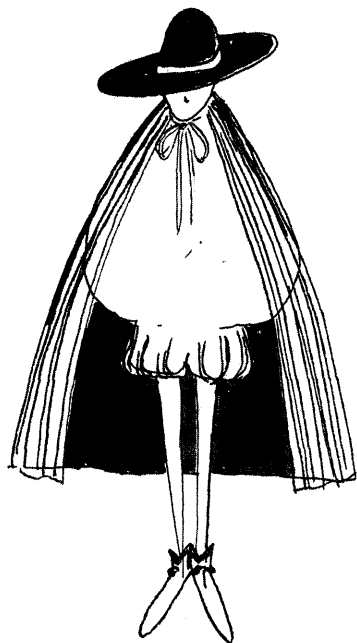
気兼ね——そうである。

遠慮——そうである。

双方とも、ガマン。忍耐に通じ、さらに状況判断に通じている。ガマンや忍耐が個人的なものだとすると、状況判断の方は責任と連動している。

とすると——

気兼ねゼロとか遠慮ゼロというような状態はありうるのだろうか。



だれにも気兼ねすることなく、言いたいことを言うことというのは、厳密に言えば自分と自分で対話をする——となるが、その場合だって「気兼ね」や「遠慮」はゼロになるのだろうか。

#### 遠慮

フツウは「遠慮」はまさに「えんりょ」であって、万事ひかえ目に、つつましく応ずることを指している。だが、少し読み方を変えて「深謀遠慮」とすれば、未来に

対する見通しとか、状況判断を冷静にとりような洞察力に近づく。そうなると、「ひかえ目に、つつましく」は見かけ上のことで、内部ではそれと逆の計算がはたらいっているということになる。

この「計算」が「理性」の原型であることはよく知られている。

やっぱり、「こわいもの無し」をあつさり断言することとはできない。「こわいもの」はオトナにもあるのだ。それは、子どもの場合とダンゼン違うとはいえず、どこかで克服したように見えるだけなのかもしれない。「これからは遠慮なく発言していきます。」と書いてきたお二人も、その時の意気込みと違って、まだいろいろな「遠慮」や「気兼ね」をしていらっしやる。特に奥さまやダンナ様に対する「気遣い」など、当方から見れば頭が下がる思いである。

こわい

こわいという感情は、後天的なものなのだろうか。

誕生後、すべてを学習していくのだと割り切ると、誕生後のあるとき、ある条件で、何かを学び、それが積み重なっていった、こわいという反応を——というようなことになるけれども、どうも少し違うようだ。

反対の立場に立つと、話のスケールはもっと神話的になり、進化的になる。

ヘビがこわい、闇がこわい、というような感情は、遠い昔、ヒトが爬虫類にいじめられていたことや、闇のなかで暮らして、外敵に脅えていたことの記憶である、という説がある。そんなに記憶力がいいのか、とたずねると、「いや、その記憶は、意識のレベルの記憶ではなく、深い、フカーイ無意識の深淵に沈澱しているのだ」という答えが返ってきた。

面白い説明だと思う。けれど、真実かどうかはわからない。説明の面白さは、カンジンの質問にさわやかに答えてくれず、答えをズーっと遠くにもっていった、**「無意識」**だの**「深淵」**だの**という得もやらぬところへオアズケしてしまうところにある。**

そういえば、「深淵」のイメージはまことにこわい。

底なし沼、黒き淵、魔が淵。これらは昔読みふけた物語や小説の中に出てくる「淵」の名まえである。

「沼」はよどんでいて、流れがない。「淵」は川の流ればよどんでいるが流れはある。

そして、これらにはかならず、不気味な物語が絡んでいた。

その昔、何とか「沼」とか、何とか「淵」と呼ばれていたところは、今では人工的に整備され、何とか「湖」とネーミングを変えたところが多い。投身者があった某「淵」は、何とかリゾートと名前を変え、ホテルやマンションに取り囲まれていて、光がサンサンと当たり、白い建物を映し、かん高い音楽でにぎやかである。

これでは、「無意識」の底のなさを説明する隠喩にはなりそうないはない。

ところが、このこと自体がコワイのだと強調する人もいる。その辺から子どもが絡まってくる。ちょっと耳を傾けよう。

## 道なき道

地震に雷、火事、オヤジ——とよく言われますナ。このうち、「オヤジ」の序列は今日ではずーと下方に押しやられてしまいましたが、やはり天災、人災に対する恐怖心は大きいのではないのでしょうか。オトナとか子どもとかいう境界線も、これらに当面すればなくなってしまう。

大地が揺らぐ。それは、足もとが揺らぐだけではありません。人間の存在が不安になるのです。動かざるごと大地のごとしという諺が通じなくなる。努力して築いてきた地位や財までが崩れてしまうかもしれない。そういう予測に人は脅えるのです。コワイですね。本当にコワイですね。

だから、いざという時のために、平時からちゃんと用意をしておきましょう。これが保険の思想です。

いまでは、目に見えないところで、保険がたくさん掛けられています。火災保険、傷害保険。その他もろも

る。これらの活字は概して小さな字でびっしりと印刷されていますが、時にはそれを丹念に読んでみることも必要ですね。現代のコワサが実にドライに表現されていますからね。

交通事故、通園・通学途時の事故、園内における事故。実に微に入り細を穿って、われわれのまわりにあります。コワサを浮きあがらせてくれます。また病気、ケガに対する場合、死亡の場合。そういう場合の群がビッシリとシステム化されていて、このような場合にはこう、というように定められています。

### ジツゾンのなコワサ

と、いうところまでは、少し気をつければだれにもわかることである。キラキラ、ツルツル、ヒラヒラしたブシカの表層をつき抜けて、少しでも深層に近づこうとすると、以下のような風景が浮かびあがってくる。

古代ギリシアの思想家たちは、感覚的に知ることができざる世界のうしろ側に、目に見えない超感覚的世界があ

ることを確信していた。それらは、心魂界と精神界で、これらが目に見える世界に統一を与える力をもっていると考えられていた。

これをわかり易く書き直すと、物質界、心魂界、精神界となり、上下に垂直的な階層をなしているものと考えられていた。これに対応するように、人間には肉体・魂・精神という三つの存在様式があるというのである。

日本語にふさわしく書き直せば、「カラダ」「ココロ」「霊」といった方が当たっている。そして、何もギリシアの思想家をもち出さなくとも、これらの三層の垂直的な世界は、ほぼ世界中のどこでも長い間存在していたところであった。

「神を畏れる」というときの「畏」は、オソレオオク、カシコクという畏敬を表わしている。

オオコワイとオソレ、オノノクことから、ナダメ、シズメ、果ては味方にトリコムために人間は、超感覚的世界があるということ信じ、それをバネにして自分の足もとを見つめるといふ飛躍を敢行したのであろう。それ

は、多様な目前のできごとに一つの意味を与えている  
「撰理」を想定するという離れ業を敢行するのにひとし  
かった。

### 諸々の敢行

雷がこわい、地震がこわい——というコワサとくらべ  
ると、水がコワイ、高いところがコワイというのは、感  
覚がより特殊なものに分化してきたことを示している。  
闇がコワイというのは、体育の鉄棒で回転するのがコワ  
イというのは大きく違う。

闇がコワイといっても、仲間が集まって、火をたき、  
そのまわりでワイワイやっていたら、コワクなくなる。  
逆に、ファイアストームだの、踊りだの、祭りだの、と  
いう新しい意味をつけ加えれば、楽しくなることだっ  
てあるのだ。これに太鼓を加え、歌を加えれば、景気づけ  
の場ともなる。

ところが鉄棒の場合、問われるのは業わざや技わざである。状  
況と身のこなしの一致を身につけるには、失敗をくり返

していくほかはない。そして、ひとたび鉄棒の技をクリ  
アすれば、コワサは完全に消え、身軽さをたのしむこと  
ができる。ああ、自由だ。そういう思いのするのはその  
ときである。

子どもはこういう諸々のコワサをクリアしていく。あ  
るときは、体当りで、あるときは、計測と沈静さを発揮  
し、別のときは咆哮と汗と涙で。

トイレット・トレーニングもそうだ。着ること、食べ  
ること、寝ることまでがそうだ。

ある時は、叱られ、怒鳴られ、叩かれ、あざけられ、  
皮肉られ、人目にさらされ——時がたって、また思い出  
話として話題にされたりしながら時のスローモーション  
のなかで。

わが身との格闘もある。うまくやれない。時間がかか  
る。気が散る。やりたいこともガマンさせられる。心は  
いつもあらゆる方面に誘われて、カンジンのことは気をひ  
かない。

愚図。のろ。下手。あわて者。やりっ放し。余計者。

邪魔者。場知らず。餓鬼。ちび。

これらの一般的呼称は、名辞として読むよりも、文脈に応じて理解さるべきセリフに近かろう。

「ダメ!」「ダメだよ」「ダメだ」「ダメですよ」「だめだねえ」「だめだなあ」「だめですねえ」「だめなんだねえ」「だめだつてば」「だめ、だめ」「だめ、だめ、だめ、だめ、だめ、だめ」、その使い分け。

たいていの人は自分の過去にこれに似たセリフが何回となく絡んでいることを記憶していよう。もし、忘れ去っているとしても、それはご本人の責任ではない。

技わざならば、身についたとたん、それまでの労苦の跡は忘れ去られてもよいのである。いや、逆に、どうやってもできなかった理由が自分でもわからなくなるくらい、「できた!」という境目は大いなる飛躍なのだ。

ことばならば、身についたとたん、使ってみたくなくなる。それまでの語彙ごいのなかに、一つの新しいことばが加わったのみで、全体の組み替えが生じるのである。これは数が増えたというだけにとどまらず、そのひとつのこ

とばが見つけ出す世界の像が広がり出すことを意味している。

態度ならば、身についたとたん、場がコワクなくなる。アがることも、トチることも、オロオロすることもなくなる。「胸を張る」ことができ、「落ち着く」こともできるからだ。

#### ハズカシイ

コワサも質を変える。

人目がコワクなる。別にジロジロ見られるわけではないのに、見られているように感じる。わが姿かたち、わがふるまい、わが目、わが頭、わが耳、わが髪、わが体臭、わが口舌、わが成績、わが位置関係——のすべてがガッチリした根拠をもっているのではなく、相手との関係で相対的にきまってしまうものであることが明々白々になつていく。

コワサは、この相対性原理の出現によって二重三重に屈折する。

先生が「ヨクヤッタネエ」とほめてくれたとする。

以前なら、それをコトバどおりに受けとめて、単純に  
よるこぶことができた。ところが、いまは違う。

よく見ると、先生はだれにでも同じようなことばを發  
している。のみならず、コトバと態度がカナラズシモー  
致していないようだ。「ヨクヤッタネエ」と言いなが  
ら、ただ単にはげましているに過ぎず、格別に「ヨクヤ  
ッタ」と承認してくれているのではない。「承認」どこ  
ろか、単なる「ツキアイ」として、「アイソ」を言っ  
ているにすぎない。つまりあれは「サービス」に過ぎない  
のではないだろうか。そう思って、あらためて眺めると、  
「ヨクヤッタネエ」と先生に言われて得意になっ  
ていた自分がハズカシイ……………

と、いうように、どこまでも、どこまでも観念にとら  
われはじめる時期がある。

観念が自分をとらえ、自分をギコチなくさせる。そこ  
を逃れようとする、観念の世界はますますふくらみ、  
当面の悩みからますます遠方にまで自分をさらっている

く。

もうやめよう、と思っても、その決意自身が、観念の  
世界への飛翔を誘い出す。

懐疑論である。これが出てくるに及び、あの「コロ  
ロ」や「霊」という世界は、小馬鹿にされていく。そこ  
で、垂直的だった三つの世界「物質界」「心魂界」「精神  
界」は、横に並べられ、「精神」と「物質」の二つに単  
純化されていく。

#### ツツパリ

これは一種のツツパリなのである。

自分が相対的に不安定になるものだから、確かな根拠  
を「精神」や「物質」の二者択一に求めていき、主観と  
客観の両者の間で堂々めぐりをする。答えのない堂々め  
ぐりのゲームをしているうちに、それまで小馬鹿にして  
いた「気兼ね」だの「遠慮」だのものもつ意味が見えてく  
る。輪郭のある「自分」と思っていたものは、実は、そ  
れほどはっきりしていたのではなくて、数々の他人との



「気兼ね」「遠慮」「気遣い」のなかで軽うじて統一を保っているような存在であることが。

それを見るのはコワイから、もういちどツッパル。

複雑なできごとを単純化する。性急に。

それも一つの態度である。別に、そのツッパリが、「数々の他人」というようなレベルから「世間」というようなシガラミに移り、また「世界」とか「歴史」とか、要するに外部へ移るにつれ、ツッパリ自体がコッケイに思われてくる。

そこで茶化しが生まれ、皮肉が生まれ、ズラし、ソラし、が生まれる。一貫した態度というよりは、ツッパっている自分のコッケイさを何とかして見まいという悲しい演出である。

味わうこと

知人から手紙が来た。言い合わせたように、あのお二人からである。だいぶ基調が変わっていた。いろいろと近況を書いてあったあとの三行が印象深かった。

「近ごろは、小学校の音楽の教科書を熱心に読み直しています。ここにはある宇宙論があります。四季があり、喜びがあり、悲しみがあります。長い長い助走をして、そのあとでやっと踏み切るようなもので、自分が走ってきたあとを見つめ直しています。」

面白いです。小さな声でうたってみることもありません。」

小さな世界の向うを見つめようとすると、こういう柔軟さが生まれてくるようだ。

別の方のはもっと大らかであった。

「毎朝、老いた夫と杖を頼りに散歩をします。ゆっくりと歩きます。車も走ってはず、新聞配達の子のバイクの音がきこえます。小鳥の声にぎやかです。ゆっくと、土を踏むつもりで歩きます。」

ガンコだった夫も、小鳥に向かって、『おお、よしよし』などと言って、パンくずを分けてやっています。』

私はこの二通の手紙を読み終えた。

ずーと前に、私はこのお二人に叱られたことがある。

こわかった。

時がたち、叱られたことなどは忘れてしまっていた。日常の仕事に夢中になっていたからである。今にして思えば、叱られたことは当時とは意味を変えてきている。こわさよりも、頼りない私に対する励ましの意味があったというように。

コワイものゼロなどという状態は、どうもなさそうである。ゼロよりも、コワイものをどう組み替えるかが問題だ。コワイものを勝手に物語や遊びに組み替えていく子どもを見ていると、そのエネルギーには圧倒される思いがする。

何がコワイ？ とインタビューを試みたら、さまざまな答えが戻ってきた。

「そりゃ、おかあさん。怒るから」「宇宙怪人」「エイズ」「げんばく」「横断歩道」

怪談はない。子どもたちは、祭りのために「おばけ屋敷」を工夫しつつ作っていた。でも、観念の世界がジメジメ、暗黒、等のイメージから切断されているから、コ

ワイものを堂々と口にできる。

ほんとにこわいものは口にするのもコワイのだが。

(名古屋大学)